平成21年度 富里歴史講座

於：富里市立図書館

第1回「下総御料牧場」

2009・5・24

～ 大久保利通の夢・皇室の牧場 ～

林 田 利 之

1．下総牧羊場と取香種畜場の開設

●旧佐倉牧

明治維新の後、佐倉七牧（図１）のうち小間子牧・矢作牧・内野牧・油田牧・高野牧・柳沢牧は、明治政府窮民授産のために開墾地として払い下げられました。しかし、取香牧だけは官有地として残され、旧佐倉牧士が管理を行っていました。

明治７年、これまで２５人いた旧佐倉牧士・同見習が５人の取締役だけとなり、久能村の藤崎勝左衛門、藤崎忠誠、新橋村の佐瀬長左衛門、香取郡本矢作村の根本鉄平、埴生郡小菅村の篠原権平が取香牧取締役に任命されました。そして、この取香牧取締役は、その後の下総牧羊場、取香種畜場の開設にあたって大きな役割を果たすことになります。

●用地の選択

明治８（１８７５）年５月、大久保利通内務卿（図２）によって近代牧畜の必要性が説かれました。そこで政府は東京勧業寮試験場内に牧羊開業取調掛を設置し、本格的な牧場建設のための用地選定に入りました。

用地選定にあたって関東地方で数箇所の候補地が設定され、これらの候補地の調査が開始されることとなります。旧佐倉牧もこの時候補地の一つとして選ばれ、千葉県を通じて６月１８日付けで調査が行われる旨の通達が行われました。調査団の一行は、７月２日に東京を発ち、房州の大貫山から旧佐倉牧、女化の原、下野へという順で調査する予定となっていました。

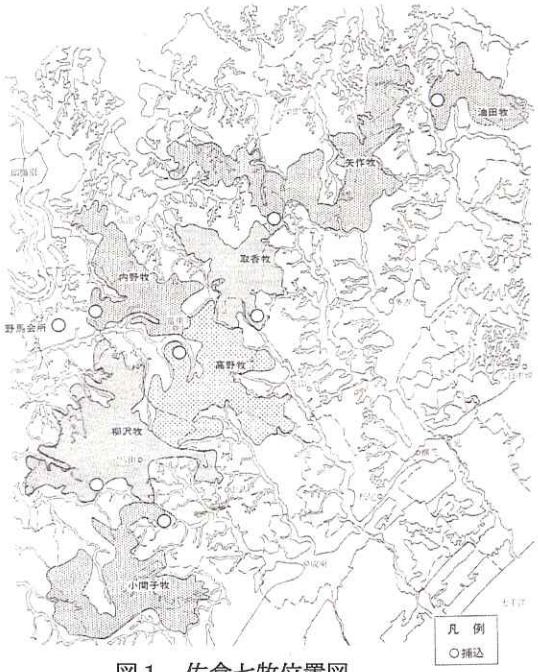

図１　佐倉七牧位置図

図２　大久保利通内務卿

この通達を受け、旧佐倉牧が所在する村々の動きが活発になり、官有地である取香牧取締役の役割は一層大変なものになりました。この時、富里村初代村長である藤崎友十郎（図３）は、藤崎は旧佐倉牧の調査にあたって、取香牧だけではなく、他の牧の調査にも呼び出しがかかる可能性があると考え、調査の期間内には他所に出かけないようにと取締役らに伝えています。

●旧佐倉牧の調査

７月８日、調査団の一行は成田に到着しました。調査団は１３名で構成され、岡田とアメリカ人ジョーンズは駿河屋に、それ以外は小川屋に宿をとりました。

この時の記録によると、雨で２日間調査が中止となり、実質４日間で取香・矢作牧を中心とした調査が実施され、１５日には次の目的地である常陸女化の原へと向かいます。

図３　富里初代村長
藤崎友十郎

ここで、調査団唯一の外人ジョーンズについて少し触れてみます。ジョーンズは大久保卿が推し進めた牧羊場開設に関して最初から大きな役割を果たしたアメリカ人牧羊家で、アメリカにおいて綿羊事業を行っていた人物と伝えられています。しかし、本国在住中の履歴についてははっきりとはわかっていません。

明治の初めに来日し、関東地方を巡って地味や気候などを調査していましたが、友人の大蔵省顧問であったゼネラル・ランドル氏の紹介で大隈重信大蔵卿（図４）に「適当な土地を選んで牧羊場を開き、政府の費用で牧草を栽培して綿羊を飼育、政府に対しては毎年１万頭、１０～１２年を満期として、１０万頭の仔羊を提供する」という事業を進言しました。

これを受けた大隈卿は性質上勧業に該当するとして、内務省の大久保卿へと話を回したのでした。

図４　大隈重信

大久保卿は予てから綿羊事業の必要性を説いていたこともあり、すぐさま、可瀬勧業権頭と岩山敬義に命じて牧羊場の開設の要否とジョーンズの計画について検討をさせました。

その結果、ジョーンズの計画はそのままでは官民の区別が明らかではないため将来に問題を抱える可能性があること、外国人の営利事業としては許可できないことなどが挙げら